

100年 カンパニー の知恵。

鈴木商館 (東京)

since 1905
田

目を付けた「極低温」

1923(大正12)年9月の関東大震災で、鈴木商館は東京・麴町の店舗などを焼失したが、翌年に新店舗を建て、39(昭和14)年には株式会社化を果たした。旧日本軍が主要取引先となっていた中で危機が訪れたのは終戦約1年半前の44年3月。初代鈴木登米治社長が病死した。後継者の2代目鈴木登米治・元会長(2013年死去)は出征中で、千田勝彦専務(後の会長)らが切り盛りした。空襲で本社を焼失し、間もなく終戦。鈴木商館は営業停止に追い込まれた。

「一時は会社の解散をも考えた」千田元会長の1985年の述懐が、2代目が復員するまでは頑張り続けたとまいったという。

社業を通じて
社会の進歩と
繁栄に貢献する

その頃2代目は、フィリピンにあった捕虜収容所にいた。失意の日々ではなかったように、収容所でシリコン(ケイ素樹脂)の存在を知って関心を持ち、46(昭和21)年に復員し、入社後には同樹脂の販売を手がけた。

同樹脂を中心とした化学分野は、戦後の新生・鈴木商館の主要事業部門に発展する。戦前から主流である高圧ガス部門も、プロパンガス、フロンガスの販売などで事業を広げていった。

71年には極低温分野へも参入した。2代目が社長就任前に米国で同分野を「面白い」と思ったのが契機。「社長のご趣味ですか」と関係先から冷やかされた社員もいたという。極低温とは絶対零度(マイナス273度)に近い温度。世界で注目されている「超電導」は、液体ヘリウムなどを用いて極低温まで超電導物質を冷却してつくられる状態だ。

大学や研究機関に極低温に関する施設が造られていき、鈴木商館が販売する米国製ヘリウム液化機が次々に採用されていった。

【佐藤浩、写真も】



高圧ガスの製造販売は昔も今も鈴木商館の主要事業だ。埼玉県上尾市の鈴商総合ガスセンターで